

教職志望学生を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討

—教職志望学生はどのように授業の雰囲気を認知しているのか—

大久保 智生・澤邊 潤*・岸 俊行**・有馬 道久・野嶋 栄一郎***

(学校教育講座) (早稲田大学大学院人間科学研究科・) (福井大学教育地域科学部) (学校教育講座) (早稲田大学人間科学学術院)
日本学術振興会特別研究員

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*359-1192 所沢市三ヶ島2-579-15 早稲田大学大学院人間科学研究科

**910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学地域教育学部

***359-1192 所沢市三ヶ島2-579-15 早稲田大学人間科学部

Examination of Atmosphere in Two Different Classes at Elementary School for Undergraduate Trainee Teachers

Tomoo Okubo, Jun Sawabe*, Toshiyuki Kishi**, Michihisa Arima
and Eiichiro Nojima***

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Graduate School of Human Sciences, Waseda University, 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa 359-1192*

***Faculty of Education and Regional Studies, University of Fukui, 3-9-1 Bunkyo, Fukui 910-8507*

****Faculty of Human Sciences, Waseda University, 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa 359-1192*

要 旨 本研究では、教職志望学生がどのように授業の雰囲気を認知しているのかを検討することを目的とした。教職志望学生169名が小学校2年生の2学級のビデオを視聴して雰囲気を評定した。分析の結果、先行研究と同様の3因子構造が確認され、教職志望学生は現職教師と一般学生とは授業の雰囲気の認知が異なることが明らかとなった。最後に、一斉授業場面での雰囲気を第三者が評定することの意義について論じられた。

キーワード 教職志望学生 授業雰囲気 第三者評定 一斉授業

問題

近年、学級崩壊、授業妨害などにより、授業が円滑に行われないという現象が問題視されてきている。最近では、こうした問題に対して、問題を起こす児童・生徒だけではなく、問題を起こさない児童・生徒や教師を含む周囲の雰囲気の視点からの研究が見直されてきており(加

藤・大久保 2006, 大久保・加藤 2006), その中でも一斉授業場面の雰囲気に焦点を当てた研究の必要性が提案されている(岸・澤邊・大久保・野嶋, 2010)。

授業の雰囲気に関する研究は、これまで主に授業中の教師と児童の発話研究の中で行われてきた。その中でも、Flanders (1970) の授業中のカテゴリー分析は、授業の雰囲気を検討した

最も有名な研究といえる。発話研究以外の授業雰囲気の研究では、わが国の吉崎・水越（1979）の授業における学級集団雰囲気の研究が挙げられる。吉崎・水越（1979）はSD法を用いて、授業の構成員である児童に授業の雰囲気を評定させ、授業の雰囲気と教師の教授行動との関連を明らかにしている。最近では、岸・野嶋（2006a）がSD法を用いて、第三者に授業の雰囲気を評定させ、授業の雰囲気と教師の教授行動との関連を明らかにしている。しかし、SD法を用いた雰囲気の測定は、三島・宇野（2004）が指摘しているように、表現が多義的であり、具体像がとらえにくいという問題点もある。加えて、これまでの授業雰囲気に関する研究は、授業の雰囲気を構成する教師や子どもが自らの参加する授業について評定を行っていた。しかし、評定する本人が自身の参加している場の雰囲気を客観的に評定することは困難である。

こうした問題点を踏まえ、岸・澤邊・大久保・野嶋（2010）は、第三者によって評定することが可能な授業雰囲気尺度を作成し、一般の大学生と現職の教師がどのように授業の雰囲気を認知しているのかを検討した。その結果、授業雰囲気尺度について、「統制的雰囲気」「自由・積極的雰囲気」「喧騒の雰囲気」の3因子が抽出された。そして、一般学生と現職教師の授業雰囲気の認知を比較したところ、一般学生と現職教師では授業雰囲気の認知が異なることが示唆され、それは一般学生と現職教師では授業雰囲気の感じ方における基準が異なっていることに起因していると考えられた。

一般学生と現職教師といった第三者による授業雰囲気の評定を行った岸ら（2010）の研究は、授業をどのような視点で見ているのかという点で非常に意義があるといえる。しかしながら、教育実践という意味で一般学生と現職教師の間に位置すると考えられる教職志望の学生がどのように授業の雰囲気を認知しているのかについては検討していない。最近では、三島（2009）が教職志望学生の授業観察の視点の検討を行っているが、授業の雰囲気という観点からの検討は行われていないのが現状である。本研究で焦

点を当てる教職志望学生は、一般学生よりも授業を見る機会が多いことから、一般学生とは授業を見る視点が異なることも予想される。また、現職の教師は実際に授業を行う中で、日常的に授業を見ていることから、授業に対する見方に関して、教職志望学生と現職の教師では見る視点が異なることが予想される。何よりも教職志望の学生の授業雰囲気の認知について一般学生と現職教師と比較することは、教師がどのように授業を見るようになっていくのかという教師の授業のとらえ方を探る上でも意義があるといえる。したがって、教職志望学生の特徴を明らかにした上で、教職志望学生の授業を見る視点が、一般学生と現職教師の視点とどのように異なるのかについて検討する必要がある。

以上を踏まえ、本研究では、教職志望学生がどのように授業の雰囲気を認知しているのかを検討する。具体的には、まず、研究1では、教職志望学生に授業の評定を行ってもらい、教職志望学生の授業雰囲気の認知の特徴について検討する。次に、研究2では、教職志望学生と一般学生および現職の教師の授業の雰囲気の認知の違いについて検討する。なお、岸ら（2010）の研究と同様に、岸・野嶋（2006b）において教師の教授方略が典型的に異なると考えられた同学年の2学級の授業を対象として、この2学級のビデオを見せ、授業雰囲気の評定を行うこととした。

研究1

目的

教職志望学生に授業の評定を行ってもらい、教職志望学生の授業雰囲気の認知の特徴について検討することが研究1の目的である。具体的には、まず、教職志望学生を対象としても岸・澤邊・大久保・野嶋（2010）の授業雰囲気尺度が3因子構造になるかを検討する。次に、事例研究的に2クラスの授業雰囲気を比較し、その差異について検討する。

方法

評定者 教員養成課程に所属する教職志望の

大学生169名（男性56名，女性113名）が調査に参加した。169名全員が教育実習を経験した後の学生であった。

評定対象 埼玉県内にある公立小学校2年生2学級（便宜上A組，B組とする）を評定対象とした。各学級とも男子14名，女子16名の計30名であった。授業者は，いずれも学級担任であり，A組は50歳代，B組は40歳代の女性教師であった。なお，2年生の2学級の授業を対象とした理由としては，同一内容の授業を同じ進度で行っており，また，岸・野嶋（2006b）において，明らかに教授方略が異なることが示されているからである。

対象授業 対象となる授業は国語の授業で，各学級5回分（1回45分授業）であった。対象学級の担任には，授業前に特別に意識することなく，普段どおりのカリキュラムで授業を進めるようにあらかじめ伝えた。映像記録は，教室全体が写るように，教室の後方と前方2箇所の計3箇所にビデオカメラを設置して授業を録画した。評定してもらう映像記録は，教室の後方から教師の動きを中心に，教室全体を俯瞰的に撮影したものを使用した。5回にわたる授業の単元は，2学級とも「あったらいいなこんなもの」「漢字クイズ」「サンゴの海の生き物たち」であった。

評定手続き 授業雰囲気の評定においては，その授業の特徴をできるだけ多くの授業をもとに総合的に判断することが不可欠である。当該学級の1回のみ授業をもとに判断した場合，教師の気分や授業内に偶発的に生じる様々な出来事によって，評定内容に違いがでてくるとも想定される。そして，授業は教師と児童・生徒のコミュニケーションの連続体であることから1回のみ授業ではなく，複数回の授業をもとに評定する必要があるといえる。しかし，各学級5回分，計10回分全ての授業を評定者が視聴することは困難であるため，一人の評定者が各学級2回分，計4回分の授業を大学の講義時間の中で視聴して，授業雰囲気の評定を行った。そして，岸ら（2010）の研究で，視聴順とユニットによって違いがみられなかったことか

ら，10通りのユニットのうち，1回目の授業と2回目の授業のユニットを評定対象とした。

質問紙 岸ら（2010）の研究で作成された「授業雰囲気尺度」を使用し，教職志望学生に授業雰囲気の評定を求めた。この尺度は，「統制的雰囲気」7項目，「自由・積極的雰囲気」6項目，「喧騒的雰囲気」5項目の3因子計18項目から構成されている。なお，回答形式は，「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）までの5件法である。

結果と考察

授業雰囲気尺度の検討 岸ら（2010）の研究では，授業雰囲気について「統制的雰囲気」「自由・積極的雰囲気」「喧騒的雰囲気」の3因子が抽出されている。したがって，先行研究のとおりならば，教職志望の学生においても同様の3因子構造が確認されるはずである。このような因子構造に関する仮説（3因子）を確認するため，授業雰囲気尺度18項目に対して確認的因子分析を行った（Figure 1）。母数の推定法は最尤法を用いて，因子間の相関を仮定した。その結果，各適合度指標の値は，適合度指標（GFI）=.90，修正適合度指標（AGFI）=.87であり，授業雰囲気尺度が3因子からなるという仮説は支持された。また，因子間相関は，「統制的雰囲気」と「自由・積極的雰囲気」および「喧騒的雰囲気」の間に負の相関が認められ，「自由・積極的雰囲気」と「喧騒的雰囲気」の間に正の相関が認められた。したがって，因子間の関係性についても岸ら（2010）の研究とほぼ同様であった。

また，尺度の信頼性を検討するため，クロンバックの α 係数を算出した。その結果，「統制的雰囲気」は.920，「自由・積極的雰囲気」は.872，「喧騒的雰囲気」は.872であった。したがって，一応の信頼性が確認された。

次に，教職志望学生における授業雰囲気尺度の性差を検討するため，授業雰囲気尺度を従属変数とし，性別を独立変数としたt検定を行った（Table 1）。その結果，A組の「統制的雰囲気」（ $t=.861$ ， $df=167$ ，n.s.），「自由・積極的雰囲気」（ $t=1.462$ ， $df=165$ ，n.s.），「喧騒的雰

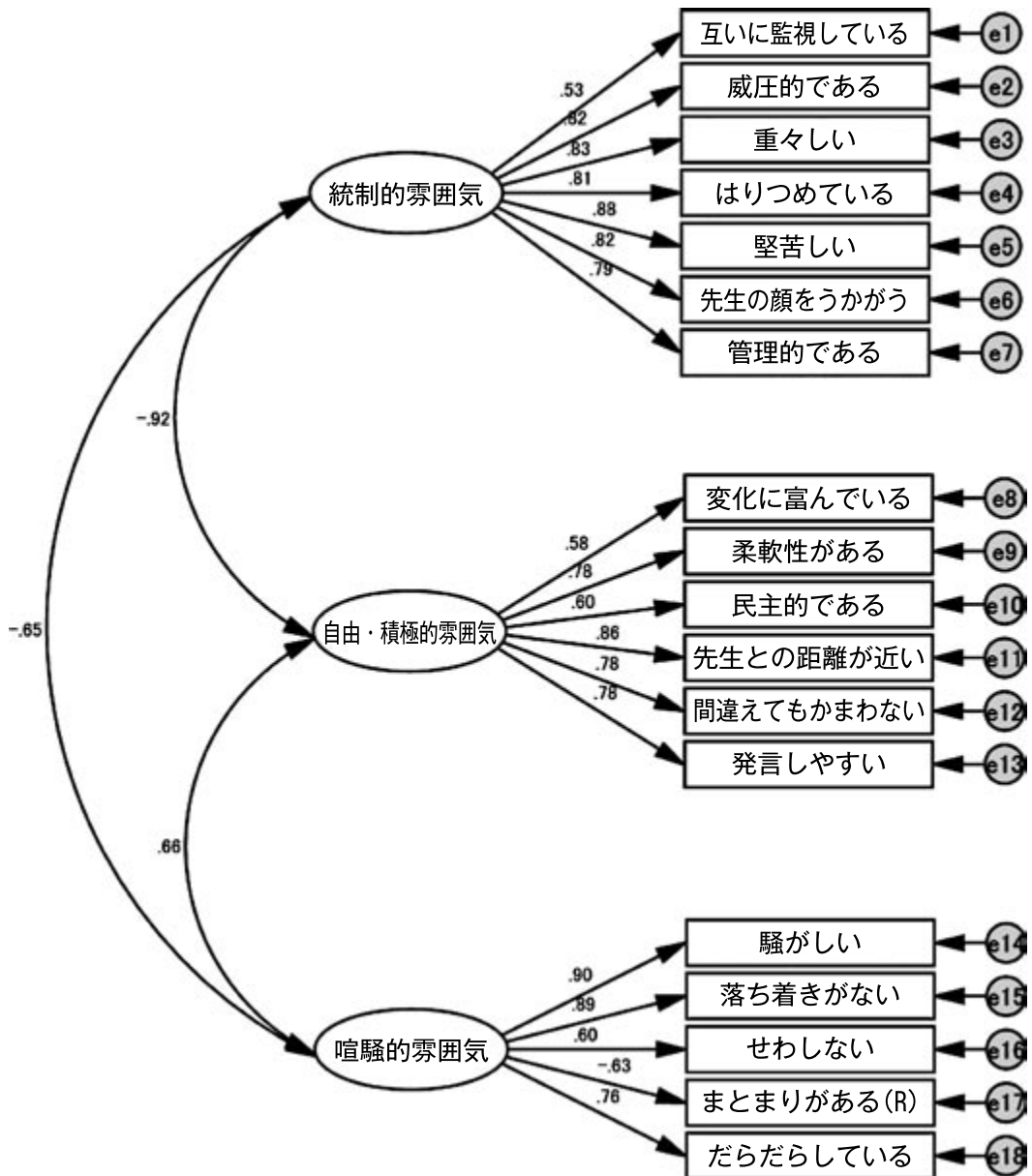


Figure 1 授業雰囲気尺度の確認的因子分析結果

雰囲気」(t=1.519, df=166, n.s.)において有意差は認められなかった。B組の「統制的雰囲気」(t=1.562, df=163, n.s.), 「自由・積極的雰囲気」(t=.266, df=165, n.s.), 「喧騒的雰囲気」(t=1.413, df=167, n.s.)においても有意差は認められなかった。したがって、授業雰囲気の認知に性差は関係しないといえる。

A組とB組の授業雰囲気の比較 教職志望学

生において授業雰囲気の評定がどのように異なるのかを検討するため、事例研究的に2クラスの授業雰囲気について対応のあるt検定を行った (Table 2)。その結果、A組はB組よりも「統制的雰囲気」が有意に高かった (t=15.408, df=164, p<.001)。B組はA組よりも「自由・積極的雰囲気」(t=13.995, df=164, p<.001)と「喧騒的雰囲気」(t=17.926, df=167, p<.001)が有

Table 1 性別ごとの授業雰囲気尺度の平均値とt検定結果

	男性 (N=56)	女性 (N=113)	t値
A組 統制的雰囲気	24.411 (5.041)	23.700 (5.067)	.861
A組 自由・積極的雰囲気	14.891 (4.211)	15.786 (3.452)	1.462
A組 喧騒的雰囲気	10.679 (2.930)	10.009 (2.570)	1.519
B組 統制的雰囲気	15.714 (4.389)	14.697 (3.723)	1.562
B組 自由・積極的雰囲気	22.250 (3.215)	22.108 (3.268)	.266
B組 喧騒的雰囲気	16.518 (3.122)	17.274 (3.349)	1.413

() 内は標準偏差

Table 2 クラスごとの授業雰囲気尺度の平均値とt検定結果

	A組	B組	t値
統制的雰囲気	23.910 (5.013)	15.042 (3.978)	15.408***
自由・積極的雰囲気	15.527 (3.705)	22.170 (3.257)	13.995***
喧騒的雰囲気	10.232 (2.705)	17.018 (3.295)	17.926***

() 内は標準偏差

*** $p<.001$

意に高かった。したがって、教職志望の学生による授業雰囲気の評定結果を比較したところ、岸ら (2010) の先行研究で現職教師が評定した結果と一致しており、一般大学生が評定した結果とは若干の違いはあるものの矛盾する結果ではないことが明らかとなった。つまり、教職志望学生は2クラスの比較において、現職教師と同様の評定を行っているといえる。

研究2

目的

教職志望学生と一般学生および現職教師の授業の雰囲気の認知の違いについて検討することが研究2の目的である。具体的には、まず、教職志望学生と一般学生および現職教師による授業雰囲気の認知を比較し、その違いについて検討する。次に、教職志望学生がどのように2クラスの授業雰囲気を評定しているのか、2つの学級の評定の関連から検討する。

方法

評定者 研究1と同じ教員養成課程に所属する教職志望の大学生169名 (男性56名, 女性113

名)。岸ら (2010) の研究に参加した一般学生20名 (男性11名, 女性9名) と現職教師31名 (男性12名, 女性19名)。一般学生20名は教職課程の授業を履修しておらず、小学校の教育や授業に関する専門的な知識を有していない大学生であった。

手続き 研究1と同様に、2年生の2学級の国語の授業のビデオを見せて、研究1と同じ授業雰囲気尺度18項目を実施し、A組とB組の雰囲気について評定してもらった。

結果と考察

教職志望学生と一般学生、現職教師の授業雰囲気の比較 教職志望学生が評定した授業雰囲気と一般学生が評定した授業雰囲気、現職教師が評定した授業雰囲気を比較するため、評定者を独立変数、2学級の授業雰囲気を従属変数とした評定者×クラスの2要因の分散分析を行った (Table 3)。その結果、「統制的雰囲気」では、評定者の主効果 ($F(2, 213) = 7.587, p < .01$) とクラスの主効果 ($F(1, 213) = 135.117, p < .001$) がみられた。「自由・積極的雰囲気」 ($F(2, 213) = 5.212, p < .01$) と「喧騒的雰囲気」 ($F(2, 216) = 6.566, p < .01$) では、評定者×クラスの

Table 3 評価者×クラスごとの授業雰囲気尺度の平均値と2要因分散分析結果

	A組			B組			2要因分散分析		
	教職志望の 大学生	現職教師	一般大学生	教職志望の 大学生	現職教師	一般大学生	クラス F値	評価者 F値	交互作用 F値
統制的 雰囲気	23.910 (5.013)	22.903 (4.407)	21.000 (7.079)	15.042 (3.978)	14.548 (2.755)	13.050 (4.334)	135.167***	7.587***	.184
自由・積極的 雰囲気	15.527 (3.705)	16.290 (4.197)	18.250 (4.745)	22.170 (3.257)	19.968 (2.677)	21.300 (4.520)	51.905***	5.055**	5.212**
喧騒的 雰囲気	10.232 (2.705)	11.129 (2.363)	9.250 (2.593)	17.018 (3.295)	16.548 (2.681)	19.500 (2.929)	254.810***	1.769	6.566**

() 内は標準偏差

p<.01 *p<.001

交互作用がみられた。

「統制的雰囲気」では、A組の授業のほうがB組の授業よりも有意に高く、教職志望学生のほうが一般学生よりも有意に高かった。したがって、A組でもB組でも教職志望学生は統制的雰囲気を高く評定していることが明らかとなった。このことは、教職志望学生が教師の言うことをきちんと聞けるような統制的雰囲気を重視していることを意味しているとも考えられる。

「自由・積極的雰囲気」では、A組の授業において一般学生が教職志望学生よりも有意に高く、B組の授業において教職志望学生が現職教師よりも有意に高かった。したがって、教職志望学生は自由・積極的雰囲気について極端な評定を下すことが明らかとなった。このことは、教職志望学生が教師になることを志望しており、一般学生に比べて、教職に対して高い理想を有している可能性があり、そのことが影響しているとも考えられる。こうした高い理想は、自由・積極的な雰囲気を望ましいと考えやすい教職志望学生ならではのものとも考えられる。

「喧騒的雰囲気」では、A組の授業において現職教師が一般学生よりも有意に高く、B組の授業において一般学生が教職志望学生と現職教師よりも有意に高かった。したがって、一般学生は喧騒的雰囲気について極端な評定を下す傾向にあることが明らかとなった。このことは、教師や教職志望学生は自らが授業を行った経験を有しているのに対して、一般学生はこうした経験のないことが影響しているとも考えられる。

教職志望学生における授業雰囲気の学級間相関 教職志望学生がどのように2クラスの授業

雰囲気を評定しているのかを検討するため、授業雰囲気尺度の合計点を算出し、評定者ごとにA組とB組の授業雰囲気得点の相関係数を算出した。

その結果、教職志望学生では $r = -.207$ ($p < .01$) と弱い負の相関が認められた。岸ら (2010) の研究では、一般学生では $r = -.654$ と高い負の相関が認められ、現職教師では $r = -.006$ と有意な相関が認められなかったが、教職志望の学生を対象とした本研究では一般学生と現職教師の中間となる値が得られた。したがって、教職志望学生は、一般学生のように自身の価値観によって評定しているわけでもなく、現職教師のように自らの授業実践を基準として評定を行っているわけでもないといえる。つまり、教育現場に接する機会の多い教職志望学生は、一般学生よりは現職教師に近い授業の捉え方をしているといえる。

総合考察

本研究では、教職志望学生がどのように授業の雰囲気を認知しているのかを検討してきた。まず、教職志望学生に授業の評定を行ってもらい、教職志望学生の授業雰囲気の認知の特徴について検討した。その結果、岸ら (2010) の研究と同様の3因子構造が確認された。また、教職志望の学生は2クラスの授業雰囲気について現職教師と類似した評定を行っていた。次に、教職志望の学生、一般学生、現職教師の比較を行ったところ、教職志望学生は、一般学生のように自身の価値観によって評定しているわけでもなく、教師のように自らの授業実践を基準と

して評定を行っているわけでもないことが明らかとなった。

本研究では授業の雰囲気を知る指標として授業雰囲気尺度を作成し、その授業を構成している教師や児童以外の第三者による授業雰囲気の評定を試みた。従来、授業を評価するのは教師や研究者といった教育従事者がその中心であった。また、授業自体が教師の教授方略に基づいた教師-子ども間の相互交渉の連続体であり、複雑な営みであるため、保護者をはじめとした一般の人が授業自体をどのように評価しているのかわからないのが現実であった。しかし、教育に対する説明責任（アカウンタビリティ）の機運が高まっている現在、より多くの人に授業を開放し、その評価の視点を明確にすることは意義のあることだといえる。また、そうすることにより、学級崩壊や授業崩壊といった教育現場が直面している問題の抑止にもつながる可能性も指摘できる。本研究で検討を行ってきた授業における雰囲気は、教師や研究者といった教育に携わっている人以外の一般の人が授業そのものを評価する一つの指標を明確にしたものであるといえる。

また、本研究の特徴の一つとして、授業雰囲気の検討の際に、一般の学生と現職教師の比較のみならず、そこに教職志望の学生を比較対象としたことがあげられる。本研究で検討してきた授業雰囲気は、授業の中で教師や子どもを独立したものとして抜き出すのではなく、教師-子どもの相互交渉そのものを対象とした視点であるといえる。そのため、授業をとらえる視点が教授内容や教授方法に偏りがちになる教職志望の学生に対して、授業を教師と子どものコミュニケーションの連続として捉える指標を提示することにつながるものであるといえる。一般学生と現職教師の授業雰囲気尺度の比較結果より、現役の教師は自らの授業実践をもとに他者の授業を評定していることが示唆されている。このことは、授業を見る視点が経験により定まってくることを示唆している。教育実習の事前指導としてマイクロティーチングを採り入れた実践を行った高橋・野嶋（1987）は、他者

の行う授業を繰り返し評定することにより、授業を見る視点が洗練されていくことを明らかにしている。本研究で行った授業雰囲気に焦点を当てた授業評定は、教職志望の学生にとって、授業を教師と子どもの相互作用としてみる視点をより明確にするという側面で意義のあることといえる。また、このような取り組みを教員養成系の大学で取り入れていくことは、学部におけるFaculty Development (FD)の観点からも、教師を目指す学生にどのような視点を内面化したいのかを明確にしているという点で、大学の出口保証につながるものであると考えられる。

今後の課題としては、2点挙げられるだろう。1点目は、評定者の問題である。これまで、一般学生、教職志望学生、現職教師といった第三者による授業雰囲気の評定を行ってきたが、開かれた授業という意味で保護者の視点にも焦点を当てる必要があるといえる。したがって、保護者が授業雰囲気をどのように認知しているのかについても検討する必要があるだろう。

2点目は、対象授業の問題である。本研究では、国語の授業を対象として授業雰囲気の評定を行ってきたが、教師の得意な教科などによって授業の雰囲気が変化する可能性もある。したがって、国語以外の別の教科の授業の雰囲気も検討する必要があるだろう。

引用文献

- Flanders, N.A. 1970. Analyzing teaching behavior. Reading, Mass: Addison-Wesley.
- 加藤弘通・大久保智生 2006 問題行動をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係：困難学級と通常学級の比較から教育心理学研究, 54, 34-44.
- 近藤邦夫 1994 教師と子どもの関係作り 東京大学出版会
- 岸俊行・野嶋栄一郎 2006a 小学校国語科の一斉授業における雰囲気の検討 人間科学研究, 19, 75-84.
- 岸俊行・野嶋栄一郎 2006b 小学校国語科授業における教師発話・児童発話に基づく授業実践の構

造分析 教育心理学研究, 54, 322-333.

岸俊行・澤邊潤・大久保智生・野嶋栄一郎 2010 学生・教師を対象とした異なる学級における授業雰囲気
の検討：授業雰囲気尺度の作成と授業雰囲気の第三者評定の試み 日本教育工学会論文誌, 34, 45-54.

大久保智生・加藤弘通 2006 問題行動を起こす生徒の学級での位置づけと学級の荒れおよび生徒文化との関連 パーソナリティ研究, 14, 205-213.

三島美砂・宇野宏幸 2004 学級雰囲気に及ぼす教師の影響力 教育心理学研究, 52, 414-425.

三島知剛 2009 教職志望学生の授業観察視点の検討：授業・教師・子どもイメージとの関連による検討 日本教育工学会論文誌, 33, 103-110.

高橋哲郎・野嶋栄一郎 1987 教育実習事前プログラムの開発とマイクロティーチングの改善に関する研究 日本教育工学会論文誌, 11, 57-70.

吉崎静夫・水越敏行 1979 児童による授業の評価：教授行動・学習行動・学級集団雰囲気の視点より 日本教育工学論文誌, 4, 41-51.